

部位別
がん研究室

FILE 10
血液のがん②

悪性リンパ腫の概要

血液のがんシリーズの第2回は、悪性リンパ腫の概要について説明します。
がん研究会有明病院の先生方にリレー形式でご執筆いただきました。

1 悪性リンパ腫とは どんな病気？

ヒトの血液細胞には白血球、赤血球、血小板がありますが、悪性リンパ腫は白血球のうちリンパ球が「がん化」し無秩序に増えてしまう病気です（悪性リンパ腫は、単に「リンパ腫」と呼ばれることもあります）。リンパ腫細胞がリンパ節で増殖するとリンパ節の腫れをきたします。悪性リンパ腫にはさまざまな種類がありますが、病気の進行速度により、大きく「低悪性度」「中悪性度」と「高悪性度」に分けられます。

低悪性度リンパ腫は、数年の経過でゆっくりと進行する一方、中悪性度リンパ腫は数か月の経過で、高悪性度リンパ腫は数週間の経過で進行します。

2 悪性リンパ腫の原因について

悪性リンパ腫を含む「血液のがん」

悪性リンパ腫に対しては、原則として抗がん剤治療を行います。ただし、悪性度や病型により、治療方針や治療経過が異なり、抗がん剤治療に加えて、放射線治療を行うこともあります。なお、慢性リンパ性白血病は、悪性リンパ腫の一病型に分類されます。

日本では、1年間に人口10万人あたり29・0人（男性31・4人、女性26・8人）が新たに悪性リンパ腫と診断され、近年増加傾向にあります。高齢になるほど発生率が高くなりますが、子どもや働き盛りの若い人でも発生し、若い世代がかかるがんとしては頻度が高いがんのひとつです。

3 悪性リンパ腫の 初期症状・病院受診の タイミング

首や腋、鼠径（足の付け根）にリンパ節の腫れを自覚し、約1か月の間で改善がない場合や急速に増大する場合は、近くの診療所・クリニックへ受診をお勧めします（図1）。なお、

は、一般に遺伝子や染色体に傷がつくことで発症すると考えられています。遺伝子や染色体に傷がつく原因として、特定の化学物質のばく露や放射線被ばく、ウイルス感染などが挙げられています。多くの場合は原因不明で、その発症の仕組みは完全には解明されていません。また悪性リンパ腫が遺伝することはありません。

図1 悪性リンパ腫の症状



やまうち のぶひこ
山内 寛彦先生
がん研究会有明病院
血液腫瘍科 副医長

2009年京都大学医学部卒業。国立がん研究センター中央病院・東病院での勤務を経て、2022年10月より現職。悪性リンパ腫をはじめとする血液診療、治療開発に従事している。

● 低悪性度リンパ腫

病気の進行が緩やかなため初期には症状が現れにくく、健康診断で発見される場合も多い病気です。健康診断の結果、血液内科の専門病院での精査を勧められる場合があります。

● 中・高悪性度リンパ腫

病気の進行が早く、リンパ節の腫れなどの症状が、月々週単位で悪化することが多いとされます。また発熱や極端な体重減少、寝汗などの全身の症状を伴うこともあります。

4 悪性リンパ腫の診断

悪性リンパ腫の診断には、病変部の生検が必要となります。生検で得られた組織を詳しく検討することにより、悪性リンパ腫の詳しい病型を決定します。また悪性リンパ腫の病気の広がりを確認するために、PET-CTなどの画像検査や骨髄検査を行います。

5 悪性リンパ腫の治療

● 低悪性度リンパ腫

低悪性度リンパ腫は、進行が緩やか

● 中・高悪性度リンパ腫

中・高悪性度リンパ腫の確定診断後に、速やかに抗がん剤治療を開始します。病型により抗がん剤の組み合わせや治療期間が異なります。予定された抗がん剤治療が完了したのち、PET-CTを用いた効果判定を行います。

である一方、抗がん剤治療などによって病気を根治させることが難しいとされています。血液検査や画像検査により、悪性リンパ腫に関連した検査値異常の有無や病変の大きさ（腫瘍量）を調べます。

腫瘍量が少ない場合は、治療を行わずに経過観察を行うことが一般的ですが、時に分子標的薬による治療が選択される場合もあります。腫瘍量が多い場合は、分子標的薬を併用した抗がん剤治療を行います。治療効果が得られた際は、続いて維持療法を行う場合があります。

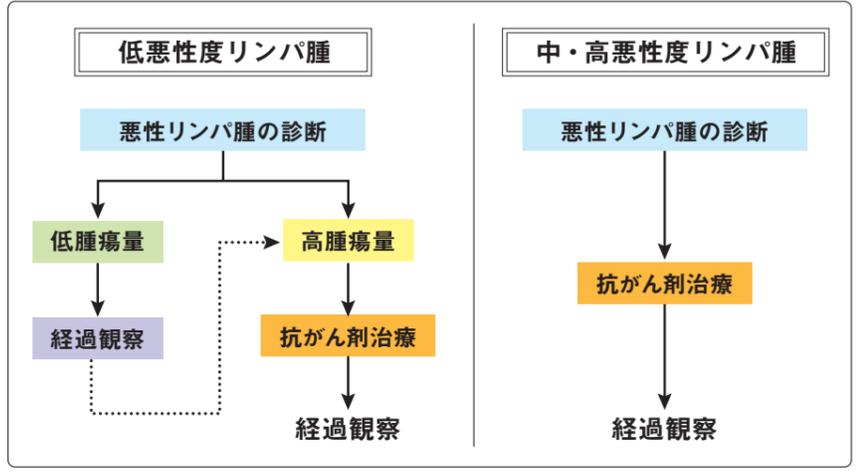
治療完了後は、定期的な外来通院で、病気の再燃・再発がないか確認します。病気の再燃・再発を認め、かつ抗がん剤治療の再開が必要と判断された場合は、初発時と異なる抗がん剤を用いることが一般的ですが、初発時と同じ治療を行うこと（再治療）もあります。

画像検査などで病変の残存が明らかには指摘できない状態のことを、「完全寛解」と呼びます。完全寛解が得られた場合は、定期的な外来通院で、病気の再燃・再発がないか確認します。病気の残存を認めた場合は、異なる種類の抗がん剤治療（これを「救済療法」といいます）を行います。病変が局限している場合は、放射線治療を行うこともあります。また、一部の患者さんでは、救済療法を行った後に大量抗がん剤治療を行う場合があります（図2）。

悪性リンパ腫のうち一部の病型では、新たな治療手段としてCAR-T（カーティ）細胞療法を行うことがあります。

CAR-T細胞療法は、患者さん自身の細胞（T細胞）を用いて悪性リンパ腫に対抗する個別化治療の一つで、抗がん剤で十分な治療効果が得られない患者さんにおける治療選択肢として期待

図2 悪性リンパ腫の治療



されています。一方、細胞の採取から実際の治療実施までに一定の時間を要する点に注意が必要です。CAR-T療法を選択するかどうかは、病型やこれまでの治療歴、患者さんや病気の状態により判断します。

次回は最終回「骨髄腫について」です。